国際フォーラム『被災地から考える』メッセージ

「被災地から考える」のテーマのもと、平成27年９月に発信した「被災地・広野町」からのメッセージを受け、被災地における様々な課題について議論するため、今回、国際フォーラムを開催しました。開催に際しては、昨年度の取り組みを発展させ、広野町だけに留まらず、双葉地域の有志や被災地で活動している専門家からなる「企画・運営会議」を設けて検討を重ねてきました。

今回、はじめて海外からの専門家が主宰するセッションが開催されたことの意味は大きく、今後もそうした場面の確保に努めていきます。

11月25日から27日までの間に、17のセッションにおいて重要なテーマについて参加者を含めた議論の末、次のような被災地の復興に向けた教訓を得ることができました。

1）発災より５年８か月が経過し、被災の程度の差により分断されていた地域が、それぞれの課題解決に取り組む中で、共通の課題が見えてきた。そうした中で、双葉８町村から中堅職員が集まった取組が行われ、成果を取りまとめたことは特筆に値する。また、そのような取組を更に推進するためには、住民が行政に対応を暗黙のうちに求めない対話の場を設定することなど、幅広い活動が期待される。

2）復興を推進している地域社会において、復興公営住宅が双葉地域に建設が開始されるなど、新たな地域社会の姿が具体化し始めている。そうした中で、地域づくりをどのように行っていくか住民全員が当事者として、考え行動することが求められている。変化する地域社会の中でそれまでにあった地域の良さを取戻し、発展させていくため、地域の活動を相互に連携する取組を進めていきたい。

3）今年４月の熊本地震に代表されるように、今年だけ見ても様々な「被災地」が生まれた。被災地間では、相違はあるものの、共通点も多い。しかし、被災地間における情報共有が十分ではないこと。また、この状況は被災地間に留まらず、被災地内の地域間でも起こっていること。この問題を解決するために、海外などの「被災地を見る目」を活用し、被災地住民が気づき、情報共有を推進した上で、課題対応にあたるべきである。

4）国内外の被災地福島への関心は薄れつつあり、福島に関する報道は、現実に反するものが見られる。今後は持続的かつ積極的な多言語による正確な情報発信が重要である。我々は、そうした偏った報道によるイメージを単に払拭するのではなく、逆にそのイメージをしっかりと受け止め、世界にエネルギー戦略、地域再生モデルといった新たな理念を提案・実施する存在を目指すものとする。

5）「被災地を見る目」は多様であり、一概に「海外」という言葉で括った中にも、多様な国や地域が存在し、それぞれが自国の立ち位置を踏まえた「被災地を見る目」を持っている。その目は、実際に被災地に足を運び、実情に触れることで大きく変化していくものと考えられる。また、そうした目が、被災地住民に新たな気づきをもたらすことが期待できる。

このため、外国語による情報発信に努め、海外から被災地を訪れる機会を増大させると共に、福島特例通訳案内士などと連携した取組を目指すものとする。

6）インフラ整備などの物的な復興は重要であるが、「こころの復興」が今回はじめて取り上げられ、祭りが持つ大きな力について、初めて気づかされた。今後、私達はそれぞれの地域の祭りの再興を地域住民の参加のもと進めていきたい。

以上の教訓から、海外を含めた「被災地を見る目」との交流、適切な情報発信が「被災地から考える」上で非常に重要である。我々は、これまで主にそれぞれの被災地で行ってきた課題対応について、地域間での連携を図ることも不可欠であると考える。

平成28年11月27日

国際フォーラム「被災地から考える」

参加者一同

広野町中学生海外研修報告会　異文化コミュニケーションプログラムinカナダ（27日 中央体育館）

長きにわたる災害に立ち向かって「希望」を語り継ぐ（26日 公民館）

双葉の農地と環境の再生　食と農の地域づくりを考える（27日 公民館）

「こころの復興」伝統行事の継承について考える（27日 公民館）

広野町のくらしと放射線（27日　公民館）

神輿や猿田彦装束を展示（公民館）

餅つき大会（27日 公民館前）